

小中学生とその保護者を対象とした教育普及活動 「博物館うらがわツアー」のアンケート解析

田中 嘉寛*

Analyses of a survey for an educational activity "Museum Back-Room Tour"
for elementary and junior high school children and their guardians

Yoshihiro TANAKA*

(要旨) 本稿では博物館の作業室や収蔵庫を用いて、来館した児童・生徒とその保護者を対象に、市民にあまり知られていない標本管理や研究などの博物館活動を紹介する教育普及活動「博物館うらがわツアー」を紹介する。「博物館うらがわツアー」の目的は、自然史に興味を持つきっかけを作ることである。その参加者を対象に「博物館うらがわツアー」の目的が達成されたか調べるために実施したアンケート調査を実施した。その結果から (A) 「博物館うらがわツアー」に参加した保護者は自然観察や体験学習を重視し、また興味を持つきっかけを作る事を望んでいる事が分かった。(B) 「博物館うらがわツアー」の目的は、参加者が標本作製や博物館活動、学芸員に対してより興味を深める変化をもたらしたことから達成された。(C) 「博物館うらがわツアー」の意義は2点あり、1つ目は博物館の特性を活かした体験学習であることから、参加した保護者のニーズに合致した活動であること。2つ目は少人数制で質問やリクエストなどのコミュニケーションをとりやすかったことが挙げられる。(D) 博物館ボランティアが展示解説を行うことによって、参加者に安心感を与え、標本の作製過程を強く印象に残し、参加者がより親しみを持てるという利点があった。そのことから博物館ボランティアがより深く博物館の普及活動に関われる可能性を示した。

キーワード：教育普及活動、バックヤードツアー、博物館標本、体験学習、博物館ボランティア

1 はじめに

福井市自然史博物館は地域に根ざした博物館で、その使命は資料収集および研究を行い市民に還元することとしている(福井市自然史博物館, 2008)。また、小中学校の学習指導要領の総則の指導計画の作成等に当たって配慮すべき事項として、各教科での体験的な学習が推奨されている(文部科学省, 2008a, b)。一方で、当館における教育普及活動の紹介とそのアンケート調査から評価を行った報告は多くはない(例えば小林, 1970; 佐藤, 2007; 梅村, 2009)。そこで、本稿では市民を対象とした体験型の教育普及活動「博物館うらがわツアー」を紹介し、そのアンケート調査から (A) 「博物館うらがわツアー」に参加した保護者が当館に望む活動 (B) 「博物館うらがわツアー」の目的の達成度 (C) 教育普及活動「博物館うらがわツアー」の意義 (D) 博物館ボランティアが連携する意義を考察した。

2 「博物館うらがわツアー」の紹介

(1) 概要

教育普及活動「博物館うらがわツアー」とは普段公開していない博物館施設および標本に実際に触れる、体験型学習である。「博物館うらがわツアー」の概要は以下の通りである。

目的：市民にあまり知られていない標本管理や研究などの博物館活動を紹介し、その体験を通して自然史に興味を持つきっかけを作ること。

対象：来館した児童・生徒とその保護者。

参加者数：児童・生徒160名、保護者67名、計227名。

生徒・児童の男女比：男：女=1.4：1。

生徒・児童年齢：平均8.3歳、詳しくは図1を参照。

解説者：学芸員および博物館ボランティア

開催期間：2009年4月から8月。

開催回数：全39回、うち博物館ボランティアと連携したのは15回であった。

所要時間：1回あたりおよそ20分程度。

*福井市自然史博物館 〒918-8006 福井市足羽上町147

*Fukui City Museum of Natural History 147 Asuwakami-cho, Fukui 918-8006, Japan

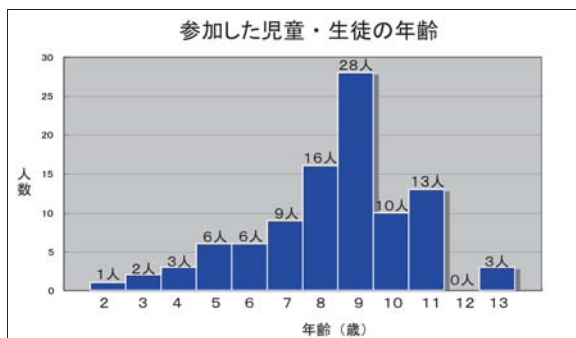


図1：参加した児童・生徒の年齢

(2) 「博物館うらがわツアー」の詳細

参加者に合わせたアテンドを行うため、毎回若干内容の変化があるが基本的な流れは以下の通りである。また、毎回ではないが、参加者あるいは博物館ボランティアから得られた重要な反応もまた記録した。

①「標本」とは何か

博物館の玄関口ではじめに解説者は自己紹介を行い、標本とは何か問いかけた。参加者はたいてい花や虫などの名詞を挙げた。解説者は「標本」がこの「博物館うらがわツアー」のキーワードであると伝えた。解説者は骨格標本を入れた箱を用意し、その標本を見てみたいかどうか参加者に問いかけ、箱の蓋を開けてもらった(図2)。この作業を行うことで解説者と参加者の一体感が増し、また児童・生徒たちの視点は箱に集中しているのを確認できた。



図2：骨標本の入った蓋を開ける参加者。

②何の骨か、どこ骨か

箱を開けると参加者はこの標本が何なのか尋ねたが、解説者はすぐに答えを出さず参加者にヒントを出すだけに止めた。参加者は標本に触れながら大きさや質感など標本の描写をはじめた。2分ほど観察した後、この標本がカモシカの骨であると告げると、参加者はカモシカのどの部位になるのか考えはじめた。参加者は活発に意見を述べた。例えば、目や歯が特徴的な頭

蓋骨はすぐに分かる傾向であった。一方で、平たい肩甲骨は羽の骨ではないかという意見もあった。1分ほど参加者と解説者との意見のやり取りを行った。

③参加者の体を使っての答え合わせ

解説者は骨標本を参加者の腕や肩、指などに添えて、部位の解説した。参加者は自分たちとカモシカの骨の長さを比べていた。参加者自身の体を用いて解説することによって実感、比較しやすくなったと考えられる。これら一連の解説の際、解説者は児童・生徒の参加者に威圧感を与えないよう屈むなどして目線を合わせている。ツアーを通して解説者は児童・生徒たちに目線をあわせて解説を行った。ここまでの所要時間は3分程度である。

④うらがわへの移動

解説者を先頭に玄関口から作業室へ移動し、その際来館者の学年や来館回数などを訊ねながらコミュニケーションをとった。作業室の手前には立ち入り禁止の看板があり、緊張感を高めた(図3)。



図3：博物館のうらがわの入り口で緊張感を高める解説者。

⑤どのように標本を作るか

作業室では博物館ボランティアと連携を行う回があったため別々に記載する。

◆博物館ボランティア連携無しの場合

作業室には標本作製中の作業机を用意した。この様子は毎回、標本作製業務によって変わり様々な反応をみることができた。参加者からの質問を受け付けた。その質問の多くは本物かどうかであった。一通りの質問を受け付けた後、標本を作る作業過程を標本入手から完成までを体系的に説明し、参加者の興味に合わせて標本の種類の説明を行った。その際、参加者は標本に触れることができた(図4)。参加者は重さや大きさだけでなくニオイなど描写していた。解説者が1つの剥製を作るために多くの時間を費やすことを説明し、展示室に展示している剥製だけでも気の遠くなる



図4：標本、タヌキの毛皮に触れる参加者。

ような労力があることを参加者に説明した。

◆博物館ボランティア連携有りの場合

作業室に入ると参加者は標本作製中の博物館ボランティアに関心を向けた。博物館ボランティアを参加者に紹介し、質問を受け付けた。質問は博物館ボランティアがどんな作業をしているのかが多かった。

⑥どのように標本を使うか

次に、作った標本を管理する収蔵庫に案内した（図5）。まず解説者は収蔵庫の感想を参加者に尋ね、たいいてい引き出しばかりの部屋だという答えが返ってきた。解説者は引き出しの中身は全て貝が入っており、この収蔵庫は貝を保管する部屋であると伝えた。また、これらの貝にはラベルがついており、ラベルが無ければ研究に使えるような標本にはならないと伝えた。ラベルには標本に関する採集地、採集日、採集者などの情報が記載されている。何か拾ったら、ラベルを作っておくと良いと伝えた。



図5：収蔵庫で標本を見る参加者。

(7) 博物館活動について

その後、参加者の興味に合わせて、標本を残すことが博物館の仕事の一つであると説明した。参加者からは収蔵庫の存在は知なかったという反応が得られた。さらに、「研究」「教育普及」など博物館活動全体に話を広げることもあった。最後に参加者から質問や見たい標本などのリクエストに可能な限り応えた。

3 結果

(1) アンケートの概要

保護者と児童・生徒のアンケートは巻末の資料に掲載した。

目的：「博物館うらがわツアー」の目的が達成されたか検証する。

件数：保護者アンケート67件、児童・生徒アンケート103件の合計170件。

実施期間：保護者アンケートは「博物館うらがわツアー」第2回から、児童・生徒アンケートは第14回から行った。そのためアンケート件数は全回通しての参加者数より少なくなっている。

回収率：保護者アンケートは100%、児童・生徒アンケートは未就学児の1件を回収できなかったため99%であった。

設問：保護者アンケートは全7項で、「満足度」を4段階評価とした。他は全て自由記述として「ツアー後の変化」「ツアーに対する意見や感想」「子供の教育方針」「博物館に望む活動」を問うた。博物館ボランティアが連携している回は自由記述で「博物館ボランティアに対する意見・感想」を問うた。児童・生徒アンケートは全4項で「満足度」「分かりやすさ」「また参加したいか」を4段階評価とし、最後に自由記述で「次にやってみたいこと」を問うた。

実施方法：アンケートはバックヤードから戻った直後に配布した。受付で回収する場合もあった。解説者を通して回収することで、アンケートに書かれている要望をすぐに伝えられる場合もあった。

(2) 保護者向けアンケートの結果

設問1：満足度

選択肢は満足、ほぼ満足、やや不満、不満の4段階とした。97%の保護者は「博物館うらがわツアー」に満足していることが分かった（図6）。不問が1件あるが、児童・生徒だけ「博物館うらがわツアー」に参

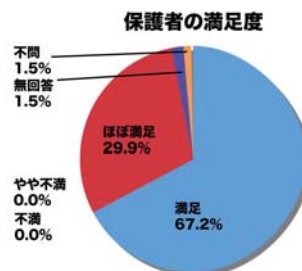


図6：保護者アンケートの満足度の内訳。

加したため不問とした。

設問2：うらがわツアーに関しての感想意見

最も多かった感想は「うらがわやそこでの作業について」述べられており13件あった。その内訳は作業室や収蔵庫などあるとは知らなかったなど「場所について」8件、標本をどのように作り、管理するのか分かったというなどの「作業について」3件、標本を見られてよかったと「標本について」が1件、「何についてかまでは分からないもの」2件あった。要望は9件ありその内訳は「告知すべき」3件、植物や昆虫なども教えてほしいなど「他分野のイベントを望む」2件、「リクエストしたかった」「もっとうらがわを見たい」など1件ずつあった。「特になし」は3件、無回答は12件であった。

設問3：ツアー後の変化

「貝の標本を作ってみます」と標本作製への興味を深めたり、「展示をじっくり見るようになった」など参加者の視点に変化がおこったりしたことが確認できた。ほか、「子供の考え方が自分とはちがうことに気が付いた」「色やニオイなどリアルな感覚で話げできた」「後学のためになった」が2件であった。「特になし」が3件、無回答が7件であった。

設問4：教育方針

保護者の参加者がどのように子供を育てたいか問うた。最も多かった意見は自然とのふれあいを大切にすること、自然に触れさせるなど「自然を体験する」で15件であった。これは保護者の参加者が自然や体験学習に対して非常に高い関心を持っている事を示している。次に多かった意見は興味を持ったものを徹底的に調べる、何にでも興味を持ってほしいなど「色々なことに興味を持たせる」で11件であった。他には「命の大切さを重視する」が2件、「自由に育てる」が1件、「本物を見せたい」が1件あった。

設問5：望む博物館の活動

最も多かった意見は生物観察会、自然教室、自然の素晴らしさを伝える活動など「野外観察会」で7件あった。また「体験学習」は4件あった。この事から、自然とのふれあいを重視する親の中に、博物館にその役割を果たしてほしいと思っている保護者は少なくないことが分かった。他に、「行事の充実」は11件、「魅力的な展示」が2件、「現状維持」が3件、「PRすべき」が1件あった。

3-3 児童・生徒向けアンケートの結果

設問1：「楽しさ」

楽しさは全体の95%が「楽しかった」を選んだ(図7)。

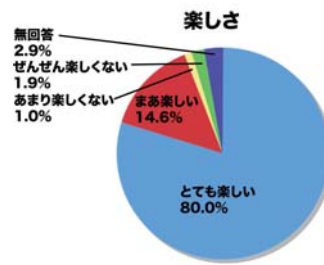


図7：児童・生徒アンケートの「楽しさ」の内訳。

設問2：「分かりやすさ」

分かりやすさは全体の93%が分かりやすいを選んだ(図8)。分かりやすさと年齢は相関関係があり、年齢が低くなるほどわかりにくくなる(図9)。本ツアーを理解できる目安としては6才以上であることが分かった。

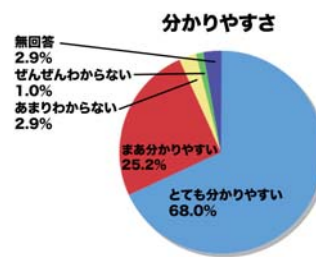


図8：児童・生徒アンケートの「分かりやすさ」の内訳。

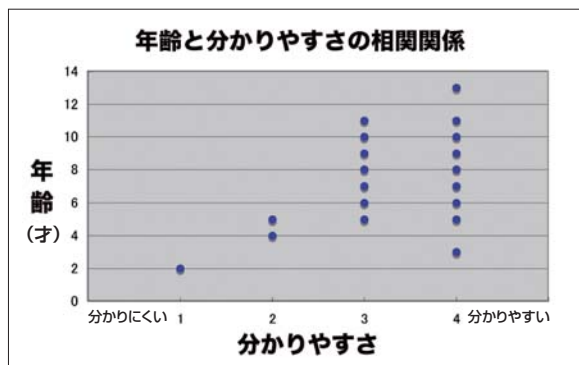


図9：分かりやすさと年齢の相関関係。

設問3：「また参加したいか」

今後も参加したいかという設問については、全体のおよそ85%からポジティブな回答を得た(図10)。

設問4：自由記述

「次になにをやりたいか」という問いに対して「骨以外の分野」が29件あり、昆虫や宇宙、化石、木の実、コケなど幅広い分野に及んだ。「ツアーの感想」は21

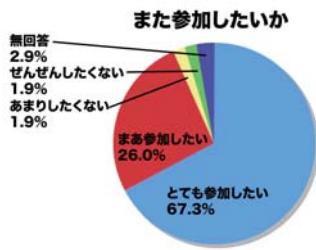


図10: 児童・生徒アンケートの「また参加したいか」の内訳。

件で、ツアーが楽しかった、標本がすごいといった内容であった。また、作業室はすごいニオイだったが、それも体験できてよかったというコメントもあった。「標本を作りたい」という意見が14件あり、特に標本とラベルの説明で用いた貝の標本を作りたいという意見が多かった。このことから児童・生徒の参加者が標本作製に興味を深めたことが確認できた。「標本とは何である」という記載は5件あり、ラベルがなければ良い標本とは言えないという記載が多かった。このことから児童・生徒の参加者が「博物館うらがわツアー」のメッセージを理解し記憶に留めていることが確認できた。「要望」は8件あり、ツアー中に少し解説した別の収蔵庫を見てみたいが多かった。他には、標本を作っている瞬間を見たいという要望が4件あり、いずれもボランティア連携無しの回であった。対応については、様々な質問ができ全部応えてくれてよかったというコメントも得た。「特になし」は1件、無回答は14件であった。

4 考察

(A) 「博物館うらがわツアー」参加者が当館に望む活動

保護者アンケートの教育方針の記述から、「博物館うらがわツアー」に参加した保護者は自然観察や体験学習に対して非常に高い関心を持っている事、何にでも興味を持ってほしいと思っている事がわかった。また、保護者アンケートの当館に望む活動の記述から野外観察会や体験学習、行事の充実を望んでいることが分かった。

(B) 教育普及活動「博物館うらがわツアー」の目的達成

「博物館うらがわツアー」の目的は市民にあまり知られていない標本管理や研究などの博物館活動を紹介し、その体験を通して自然史に興味を持つきっかけを作ることであった。参加者の変化を見てみると、保護者のアンケートから標本作製への興味を深め、展示の見方が変わるなど参加者の視点に変化が起こったことが確認できた。また、児童・生徒アンケートからは「標本を作りたい」「標本を作っている瞬間をみたい」な

ど標本作製への興味が深まったことが確認できた。「博物館うらがわツアー」後に参加者とコミュニケーションする機会があった。その際、どのようにして学芸員になるかという質問を受けた。この事から博物館活動だけでなく学芸員にも興味を深めたことも確認できた。このようなことから目的は達成されたと考えられる。

(C) 教育普及活動「博物館うらがわツアー」の意義

保護者の望む活動と合致:「博物館うらがわツアー」は標本作製現場や収蔵庫を見学しながら標本に触れるなど、博物館の特性を活かした体験学習である。また、参加した保護者は体験学習を重視していることが分かった。そのことから「博物館うらがわツアー」は参加した保護者のニーズに合致した活動である。

少人数制:収蔵庫では視界が悪くなるため参加者全体へ目が届きにくくなってしまう。そのため「博物館うらがわツアー」は少人数制を採ってきた。「博物館うらがわツアー」を通して解説者1人あたり参加者は平均4.1人であり、参加者からの質問やリクエストが多々された。少人数制によってコミュニケーションしやすい雰囲気を作ることができた。これが高い満足度につながっていると考えられる。今後はこの高い満足度を維持しつつ、より多くの来館者に「博物館うらがわツアー」に参加していただく工夫が必要である。

(D) 博物館ボランティアが連携する意義

博物館ボランティア連携が有る回と無い回のアンケートを比較した結果、博物館ボランティアが参加者に与える影響は3つあると考えられる。1つは、博物館ボランティア連携無しの時は「作業室が怖い」という意見があったが、博物館ボランティア連携の時は「怖い」という意見はなかった。そのことから博物館ボランティアがあらかじめ作業室にいて参加者に安心感を与えていると考えられる。2つ目は、博物館ボランティア連携無しの時は「作業している瞬間を見てみたかった」という意見が多かったが、博物館ボランティア連携有りの時は「うらがわを見て標本を見る目が変わった」という感想があった。博物館ボランティアが作業を行っている所を紹介することで、参加者に標本作製の過程を強く印象づけることができていた。3つ目は、保護者のアンケートから博物館ボランティアに対する意見・感想の項目で「分かりやすい」「親しみやすい」というコメントを得た。これらの点から博物館ボランティアが参加者に良い影響を与えている。また、解説した博物館ボランティアから「初めて一般の人に解剖しているところを説明した」「またこのようなツアーを行いたい」といったコメントを得た。このことから参加者だけでなく、解説者側に立つ博物

館ボランティアも満足したことが確認できた。これらのことから博物館ボランティアが解説することで参加者だけでなく博物館ボランティア当人にもよい影響があり、博物館ボランティアがより深く博物館の普及活動に関われる可能性を示した。

謝 辞

湯浅万紀子准教授、小林快次准教授（ともに北海道大学総合博物館）には有益なアドバイスをいただいた。博物館ボランティアとして解説していただいた小寺仁美氏、中浜稜太氏、播戸詠二氏（ともに福井市自然史博物館ボランティア・骨部）、博物館うらがわツアーに参加して下さった来館者の皆様に心より厚くお礼申し上げる。

引用文献

福井市自然史博物館, 2008, 福井市自然史博物館展示ガイド. 福井市自然史博物館. 54p.
 小林貞七, 1970, アンケートに見る“収集品の名前を聞く会”, 福井県博物同好会会報, (17), 53-60.
 文部科学省, 2008a, 小学校学習指導要領. 東山書房. 235p.
 文部科学省, 2008b, 中学校学習指導要領. 東山書房. 237p.
 佐藤友香, 2007, 学校巡回展「福井発：生きものたちのSOS～消えゆくふるさとの動植物～」と 出前授業による生徒の理解について, 福井市自然史博物館研究報告, (54), 95-100.
 梅村信哉, 2009, 自然史博物館における体験型行事に対する参加者の声—ネムリユスリカ蘇生実験におけるアンケート調査の解析から—, 福井市自然史博物館研究報告, (56), 65-72

Analyses of a survey for an educational activity “Museum Back-Room Tour” for elementary and junior high school children and their guardians
 Yoshihiro TANAKA

Abstract

In this paper, an educational activity “Museum Back-Room Tour” for elementary and junior high students and their guardians is introduced. The purpose of the tour is to create greater interest in natural history, through that introduce how museums manage specimens and perform research. The degree to which the tour achieves its purposes is assessed by analyzing a questionnaire given to participants of the tour. One result of the analysis is that (A) guardians who join the tour place a greater emphasis on natural observation and Experiential Learning. A second conclusion is (B) The purpose of the tour is being accomplished because after the tour participants have more interest in making specimens, museum activities and becoming a curator. (C) The significances of the tour is twofold. First, the tour meets the needs of the guardians, who join the tour because it involves experimental learning with the use of museum features. Second, the participants and the curator can communicate frequently because the tour is only attended by a small number of participants each time. (D) The fact that the tour, supported by the museum volunteers is to increase participant comfort level and to impress upon them the process of preparation. Participants feel an affinity with museum volunteers. These concepts suggest that museum volunteers can get involved in the educational activities at the museum.

Keywords: educational activity, Museum Back-Room Tour, museum specimen, experiential learning, volunteer at museum

資料：「博物館うらがわツアー」で実施したアンケート。左：保護者対象。右：児童・生徒対象。

ご意見・ご感想を聞かせてください！

博物館うらがわツアーはいかがでしたか。このようなミニイベントは当館でも嬉しいばかりです。今後、よりよいミニイベントとするためアンケートにご協力をお願いします。

- ミニイベントを4段階で評価してください。 [1:不満, 2:やや不満, 3:ほぼ満足, 4:満足] (その理由:)
- ミニイベント後、みなさんに何か変化や会話がありましたか
- 本日解説した博物館ボランティアに対するご意見・ご感想をお聞かせください
- そのほか本イベントに対するご意見・ご感想をお聞かせください
- 博物館ボランティアの存在はご存知でしたか？ (はい・いいえ)
- お子様に対しどのような教育を心がけていますか
- 保護者の視点から、今後博物館にどのような活動を望みますか

●参加して下さった人数と年齢

●どちらにお住まいですか
 福井市内 ・ 市外 ・ 県外

(●福井市内とお客えになった方、どの地区にお住まいですか)
 中部 (香山・宝永・麻化・松本・日之出・船・日新)
 南西部 (木田・霧のり・足羽・湊)
 南西部 (東安部・蛤部・社北・社西・麻生津)
 北東部 (和田・内山・旁葉・岡保・東藤島)
 北部 (西藤島・中藤島・河合・四田・明断)
 南西部 (安部・光・殿下・越前・清水)
 北西部 (大安寺・国見・廣葉・本郷・宮ノ下)
 南東部 (衛生・一東・上文殊・東郷・栗山)

ご協力ありがとうございます 福井市自然史博物館

感想をおしえてください

あなたは 小・中 学校 () 年生 () 才 (男・女)

- 今日の博物館うらがわツアーに参加した感想 (☹️)

とても楽しかった 楽しかった 楽しくなかった ぜんぜん楽しかった

- 内容はどうでしたか (☹️)

とてもわかりやすい わかりやすい わかりにくい ぜんぜんわかりにくい

- また参加したいですか (☹️)

とても参加したい 参加したい したくない ぜんぜんしたくない

4. つぎにやってみたいことや疑問がついたことを書いてください

ありがとうございました

福井市自然史博物館

小中学生とその保護者を対象とした教育普及活動 「博物館うらがわツアー」のアンケート解析

田中 嘉寛*

Analyses of a survey for an educational activity "Museum Back-Room Tour"
for elementary and junior high school children and their guardians

Yoshihiro TANAKA*

(要旨) 本稿では博物館の作業室や収蔵庫を用いて、来館した児童・生徒とその保護者を対象に、市民にあまり知られていない標本管理や研究などの博物館活動を紹介する教育普及活動「博物館うらがわツアー」を紹介する。「博物館うらがわツアー」の目的は、自然史に興味を持つきっかけを作ることである。その参加者を対象に「博物館うらがわツアー」の目的が達成されたか調べるために実施したアンケート調査を実施した。その結果から (A) 「博物館うらがわツアー」に参加した保護者は自然観察や体験学習を重視し、また興味を持つきっかけを作る事を望んでいる事が分かった。(B) 「博物館うらがわツアー」の目的は、参加者が標本作製や博物館活動、学芸員に対してより興味を深める変化をもたらしたことから達成された。(C) 「博物館うらがわツアー」の意義は2点あり、1つ目は博物館の特性を活かした体験学習であることから、参加した保護者のニーズに合致した活動であること。2つ目は少人数制で質問やリクエストなどのコミュニケーションをとりやすかったことが挙げられる。(D) 博物館ボランティアが展示解説を行うことによって、参加者に安心感を与え、標本の作製過程を強く印象に残し、参加者がより親しみを持てるという利点があった。そのことから博物館ボランティアがより深く博物館の普及活動に関われる可能性を示した。

キーワード：教育普及活動、バックヤードツアー、博物館標本、体験学習、博物館ボランティア

1 はじめに

福井市自然史博物館は地域に根ざした博物館で、その使命は資料収集および研究を行い市民に還元することとしている(福井市自然史博物館, 2008)。また、小中学校の学習指導要領の総則の指導計画の作成等に当たって配慮すべき事項として、各教科での体験的な学習が推奨されている(文部科学省, 2008a, b)。一方で、当館における教育普及活動の紹介とそのアンケート調査から評価を行った報告は多くはない(例えば小林, 1970; 佐藤, 2007; 梅村, 2009)。そこで、本稿では市民を対象とした体験型の教育普及活動「博物館うらがわツアー」を紹介し、そのアンケート調査から (A) 「博物館うらがわツアー」に参加した保護者が当館に望む活動 (B) 「博物館うらがわツアー」の目的の達成度 (C) 教育普及活動「博物館うらがわツアー」の意義 (D) 博物館ボランティアが連携する意義を考察した。

2 「博物館うらがわツアー」の紹介

(1) 概要

教育普及活動「博物館うらがわツアー」とは普段公開していない博物館施設および標本に実際に触れる、体験型学習である。「博物館うらがわツアー」の概要は以下の通りである。

目的：市民にあまり知られていない標本管理や研究などの博物館活動を紹介し、その体験を通して自然史に興味を持つきっかけを作ること。

対象：来館した児童・生徒とその保護者。

参加者数：児童・生徒160名、保護者67名、計227名。

生徒・児童の男女比：男：女=1.4：1。

生徒・児童年齢：平均8.3歳、詳しくは図1を参照。

解説者：学芸員および博物館ボランティア

開催期間：2009年4月から8月。

開催回数：全39回、うち博物館ボランティアと連携したのは15回であった。

所要時間：1回あたりおよそ20分程度。

*福井市自然史博物館 〒918-8006 福井市足羽上町147

*Fukui City Museum of Natural History 147 Asuwakami-cho, Fukui 918-8006, Japan

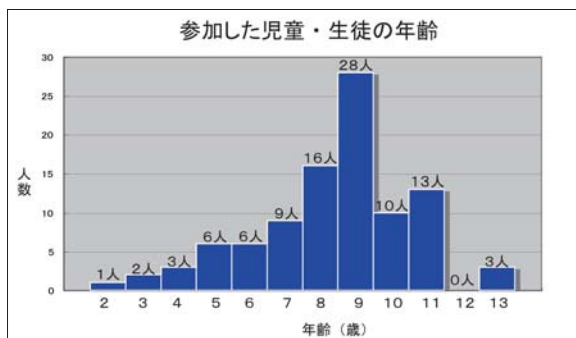


図1：参加した児童・生徒の年齢

(2) 「博物館うらがわツアー」の詳細

参加者に合わせたアテンドを行うため、毎回若干内容の変化があるが基本的な流れは以下の通りである。また、毎回ではないが、参加者あるいは博物館ボランティアから得られた重要な反応もまた記録した。

①「標本」とは何か

博物館の玄関口ではじめに解説者は自己紹介を行い、標本とは何か問いかけた。参加者はたいてい花や虫などの名詞を挙げた。解説者は「標本」がこの「博物館うらがわツアー」のキーワードであると伝えた。解説者は骨格標本を入れた箱を用意し、その標本を見てみたいかどうか参加者に問いかけ、箱の蓋を開けてもらった(図2)。この作業を行うことで解説者と参加者の一体感が増し、また児童・生徒たちの視点は箱に集中しているのを確認できた。



図2：骨標本の入った蓋を開ける参加者。

②何の骨か、どこ骨か

箱を開けると参加者はこの標本が何なのか尋ねたが、解説者はすぐに答えを出さず参加者にヒントを出すだけに止めた。参加者は標本に触れながら大きさや質感など標本の描写をはじめた。2分ほど観察した後、この標本がカモシカの骨であると告げると、参加者はカモシカのどの部位になるのか考えはじめた。参加者は活発に意見を述べた。例えば、目や歯が特徴的な頭

蓋骨はすぐに分かる傾向であった。一方で、平たい肩甲骨は羽の骨ではないかという意見もあった。1分ほど参加者と解説者との意見のやり取りを行った。

③参加者の体を使っての答え合わせ

解説者は骨標本を参加者の腕や肩、指などに添えて、部位の解説した。参加者は自分たちとカモシカの骨の長さを比べていた。参加者自身の体を用いて解説することによって実感、比較しやすくなったと考えられる。これら一連の解説の際、解説者は児童・生徒の参加者に威圧感を与えないよう屈むなどして目線を合わせている。ツアーを通して解説者は児童・生徒たちに目線をあわせて解説を行った。ここまでの所要時間は3分程度である。

④うらがわへの移動

解説者を先頭に玄関口から作業室へ移動し、その際来館者の学年や来館回数などを訊ねながらコミュニケーションをとった。作業室の手前には立ち入り禁止の看板があり、緊張感を高めた(図3)。



図3：博物館のうらがわの入り口で緊張感を高める解説者。

⑤どのように標本を作るか

作業室では博物館ボランティアと連携を行う回があったため別々に記載する。

◆博物館ボランティア連携無しの場合

作業室には標本作製中の作業机を用意した。この様子は毎回、標本作製業務によって変わり様々な反応をみることができた。参加者からの質問を受け付けた。その質問の多くは本物かどうかであった。一通りの質問を受け付けた後、標本を作る作業過程を標本入手から完成までを体系的に説明し、参加者の興味に合わせて標本の種類の説明を行った。その際、参加者は標本に触れることができた(図4)。参加者は重さや大きさだけでなくニオイなど描写していた。解説者が1つの剥製を作るために多くの時間を費やすことを説明し、展示室に展示している剥製だけでも気の遠くなる



図4：標本、タヌキの毛皮に触れる参加者。

ような労力があることを参加者に説明した。

◆博物館ボランティア連携有りの場合

作業室に入ると参加者は標本作製中の博物館ボランティアに関心を向けた。博物館ボランティアを参加者に紹介し、質問を受け付けた。質問は博物館ボランティアがどんな作業をしているのかが多かった。

⑥どのように標本を使うか

次に、作った標本を管理する収蔵庫に案内した（図5）。まず解説者は収蔵庫の感想を参加者に尋ね、たいいてい引き出しばかりの部屋だという答えが返ってきた。解説者は引き出しの中身は全て貝が入っており、この収蔵庫は貝を保管する部屋であると伝えた。また、これらの貝にはラベルがついており、ラベルが無ければ研究に使えるような標本にはならないと伝えた。ラベルには標本に関する採集地、採集日、採集者などの情報が記載されている。何か拾ったら、ラベルを作っておくと良いと伝えた。



図5：収蔵庫で標本を見る参加者。

(7) 博物館活動について

その後、参加者の興味に合わせて、標本を残すことが博物館の仕事の一つであると説明した。参加者からは収蔵庫の存在は知なかったという反応が得られた。さらに、「研究」「教育普及」など博物館活動全体に話を広げることもあった。最後に参加者から質問や見たい標本などのリクエストに可能な限り応えた。

3 結果

(1) アンケートの概要

保護者と児童・生徒のアンケートは巻末の資料に掲載した。

目的：「博物館うらがわツアー」の目的が達成されたか検証する。

件数：保護者アンケート67件、児童・生徒アンケート103件の合計170件。

実施期間：保護者アンケートは「博物館うらがわツアー」第2回から、児童・生徒アンケートは第14回から行った。そのためアンケート件数は全回通しての参加者数より少なくなっている。

回収率：保護者アンケートは100%、児童・生徒アンケートは未就学児の1件を回収できなかったため99%であった。

設問：保護者アンケートは全7項で、「満足度」を4段階評価とした。他は全て自由記述として「ツアー後の変化」「ツアーに対する意見や感想」「子供の教育方針」「博物館に望む活動」を問うた。博物館ボランティアが連携している回は自由記述で「博物館ボランティアに対する意見・感想」を問うた。児童・生徒アンケートは全4項で「満足度」「分かりやすさ」「また参加したいか」を4段階評価とし、最後に自由記述で「次にやってみたいこと」を問うた。

実施方法：アンケートはバックヤードから戻った直後に配布した。受付で回収する場合もあった。解説者を通して回収することで、アンケートに書かれている要望をすぐに伝えられる場合もあった。

(2) 保護者向けアンケートの結果

設問1：満足度

選択肢は満足、ほぼ満足、やや不満、不満の4段階とした。97%の保護者は「博物館うらがわツアー」に満足していることが分かった（図6）。不問が1件あるが、児童・生徒だけ「博物館うらがわツアー」に参

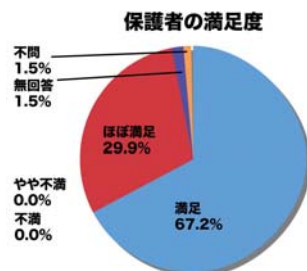


図6：保護者アンケートの満足度の内訳。

加したため不問とした。

設問2：うらがわツアーに関しての感想意見

最も多かった感想は「うらがわやそこでの作業について」述べられており13件あった。その内訳は作業室や収蔵庫などあるとは知らなかったなど「場所について」8件、標本をどのように作り、管理するのか分かったというなどの「作業について」3件、標本を見られてよかったと「標本について」が1件、「何についてかまでは分からないもの」2件あった。要望は9件ありその内訳は「告知すべき」3件、植物や昆虫なども教えてほしいなど「他分野のイベントを望む」2件、「リクエストしたかった」「もっとうらがわを見たい」など1件ずつあった。「特になし」は3件、無回答は12件であった。

設問3：ツアー後の変化

「貝の標本を作ってみます」と標本作製への興味を深めたり、「展示をじっくり見るようになった」など参加者の視点に変化がおこったりしたことが確認できた。ほか、「子供の考え方が自分とはちがうことに気が付いた」「色やニオイなどリアルな感覚で話げできた」「後学のためになった」が2件であった。「特になし」が3件、無回答が7件であった。

設問4：教育方針

保護者の参加者がどのように子供を育てたいか問うた。最も多かった意見は自然とのふれあいを大切にすること、自然に触れさせるなど「自然を体験する」で15件であった。これは保護者の参加者が自然や体験学習に対して非常に高い関心を持っている事を示している。次に多かった意見は興味を持ったものを徹底的に調べる、何にでも興味を持ってほしいなど「色々なことに興味を持たせる」で11件であった。他には「命の大切さを重視する」が2件、「自由に育てる」が1件、「本物を見せたい」が1件あった。

設問5：望む博物館の活動

最も多かった意見は生物観察会、自然教室、自然の素晴らしさを伝える活動など「野外観察会」で7件あった。また「体験学習」は4件あった。この事から、自然とのふれあいを重視する親の中に、博物館にその役割を果たしてほしいと思っている保護者は少なくないことが分かった。他に、「行事の充実」は11件、「魅力的な展示」が2件、「現状維持」が3件、「PRすべき」が1件あった。

3-3 児童・生徒向けアンケートの結果

設問1：「楽しさ」

楽しさは全体の95%が「楽しかった」を選んだ(図7)。

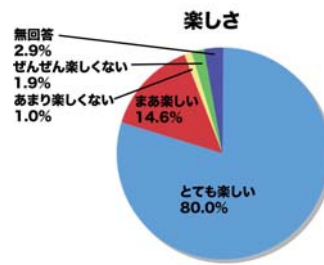


図7：児童・生徒アンケートの「楽しさ」の内訳。

設問2：「分かりやすさ」

分かりやすさは全体の93%が分かりやすいを選んだ(図8)。分かりやすさと年齢は相関関係があり、年齢が低くなるほどわかりにくくなる(図9)。本ツアーを理解できる目安としては6才以上であることが分かった。

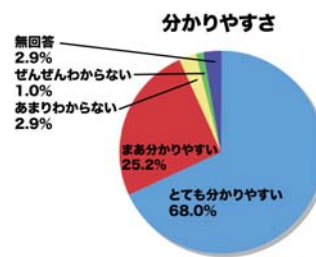


図8：児童・生徒アンケートの「分かりやすさ」の内訳。

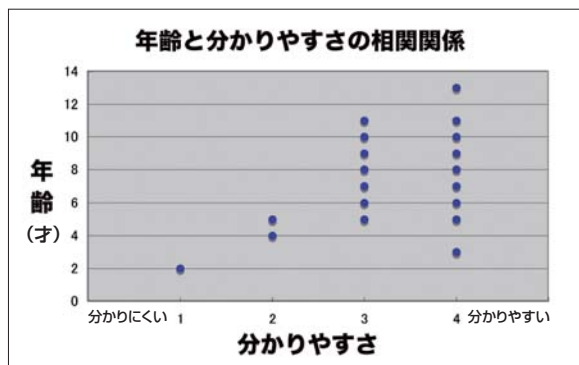


図9：分かりやすさと年齢の相関関係。

設問3：「また参加したいか」

今後も参加したいかという設問については、全体のおよそ85%からポジティブな回答を得た(図10)。

設問4：自由記述

「次になにをやりたいか」という問いに対して「骨以外の分野」が29件あり、昆虫や宇宙、化石、木の実、コケなど幅広い分野に及んだ。「ツアーの感想」は21

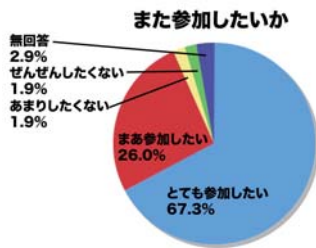


図10: 児童・生徒アンケートの「また参加したいか」の内訳。

件で、ツアーが楽しかった、標本がすごいといった内容であった。また、作業室はすごいニオイだったが、それも体験できてよかったというコメントもあった。「標本を作りたい」という意見が14件あり、特に標本とラベルの説明で用いた貝の標本を作りたいという意見が多かった。このことから児童・生徒の参加者が標本作製に興味を深めたことが確認できた。「標本とは何である」という記載は5件あり、ラベルがなければ良い標本とは言えないという記載が多かった。このことから児童・生徒の参加者が「博物館うらがわツアー」のメッセージを理解し記憶に留めていることが確認できた。「要望」は8件あり、ツアー中に少し解説した別の収蔵庫を見てみたいが多かった。他には、標本を作っている瞬間を見たいという要望が4件あり、いずれもボランティア連携無しの回であった。対応については、様々な質問ができ全部応えてくれてよかったというコメントも得た。「特になし」は1件、無回答は14件であった。

4 考察

(A) 「博物館うらがわツアー」参加者が当館に望む活動

保護者アンケートの教育方針の記述から、「博物館うらがわツアー」に参加した保護者は自然観察や体験学習に対して非常に高い関心を持っている事、何にでも興味を持ってほしいと思っている事がわかった。また、保護者アンケートの当館に望む活動の記述から野外観察会や体験学習、行事の充実を望んでいることが分かった。

(B) 教育普及活動「博物館うらがわツアー」の目的達成

「博物館うらがわツアー」の目的は市民にあまり知られていない標本管理や研究などの博物館活動を紹介し、その体験を通して自然史に興味を持つきっかけを作ることであった。参加者の変化を見てみると、保護者のアンケートから標本作製への興味を深め、展示の見方が変わるなど参加者の視点に変化が起こったことが確認できた。また、児童・生徒アンケートからは「標本を作りたい」「標本を作っている瞬間をみたい」な

ど標本作製への興味が深まったことが確認できた。「博物館うらがわツアー」後に参加者とコミュニケーションする機会があった。その際、どのようにして学芸員になるかという質問を受けた。この事から博物館活動だけでなく学芸員にも興味を深めたことも確認できた。このようなことから目的は達成されたと考える。

(C) 教育普及活動「博物館うらがわツアー」の意義

保護者の望む活動と合致:「博物館うらがわツアー」は標本作製現場や収蔵庫を見学しながら標本に触れるなど、博物館の特性を活かした体験学習である。また、参加した保護者は体験学習を重視していることが分かった。そのことから「博物館うらがわツアー」は参加した保護者のニーズに合致した活動である。

少人数制:収蔵庫では視界が悪くなるため参加者全体へ目が届きにくくなってしまう。そのため「博物館うらがわツアー」は少人数制を採ってきた。「博物館うらがわツアー」を通して解説者1人あたり参加者は平均4.1人であり、参加者からの質問やリクエストが多々された。少人数制によってコミュニケーションしやすい雰囲気を作ることができた。これが高い満足度につながっていると考えられる。今後はこの高い満足度を維持しつつ、より多くの来館者に「博物館うらがわツアー」に参加していただく工夫が必要である。

(D) 博物館ボランティアが連携する意義

博物館ボランティア連携が有る回と無い回のアンケートを比較した結果、博物館ボランティアが参加者に与える影響は3つあると考えられる。1つは、博物館ボランティア連携無しの時は「作業室が怖い」という意見があったが、博物館ボランティア連携の時は「怖い」という意見はなかった。そのことから博物館ボランティアがあらかじめ作業室にいて参加者に安心感を与えていると考えられる。2つ目は、博物館ボランティア連携無しの時は「作業している瞬間を見てみたかった」という意見が多かったが、博物館ボランティア連携有りの時は「うらがわを見て標本を見る目が変わった」という感想があった。博物館ボランティアが作業を行っている所を紹介することで、参加者に標本作製の過程を強く印象づけることができていた。3つ目は、保護者のアンケートから博物館ボランティアに対する意見・感想の項目で「分かりやすい」「親しみやすい」というコメントを得た。これらの点から博物館ボランティアが参加者に良い影響を与えている。また、解説した博物館ボランティアから「初めて一般の人に解剖しているところを説明した」「またこのようなツアーを行いたい」といったコメントを得た。このことから参加者だけでなく、解説者側に立つ博物

館ボランティアも満足したことが確認できた。これらのことから博物館ボランティアが解説することで参加者だけでなく博物館ボランティア当人にもよい影響があり、博物館ボランティアがより深く博物館の普及活動に関われる可能性を示した。

謝 辞

湯浅万紀子准教授、小林快次准教授（ともに北海道大学総合博物館）には有益なアドバイスをいただいた。博物館ボランティアとして解説していただいた小寺仁美氏、中浜稜太氏、播戸詠二氏（ともに福井市自然史博物館ボランティア・骨部）、博物館うらがわツアーに参加して下さった来館者の皆様に心より厚くお礼申し上げる。

引用文献

福井市自然史博物館, 2008, 福井市自然史博物館展示ガイド. 福井市自然史博物館. 54p.
 小林貞七, 1970, アンケートに見る“収集品の名前を聞く会”, 福井県博物同好会会報, (17), 53-60.
 文部科学省, 2008a, 小学校学習指導要領. 東山書房. 235p.
 文部科学省, 2008b, 中学校学習指導要領. 東山書房. 237p.
 佐藤友香, 2007, 学校巡回展「福井発：生きものたちのSOS～消えゆくふるさとの動植物～」と 出前授業による生徒の理解について, 福井市自然史博物館研究報告, (54), 95-100.
 梅村信哉, 2009, 自然史博物館における体験型行事に対する参加者の声—ネムリユスリカ蘇生実験におけるアンケート調査の解析から—, 福井市自然史博物館研究報告, (56), 65-72

Analyses of a survey for an educational activity “Museum Back-Room Tour” for elementary and junior high school children and their guardians
 Yoshihiro TANAKA

Abstract

In this paper, an educational activity “Museum Back-Room Tour” for elementary and junior high students and their guardians is introduced. The purpose of the tour is to create greater interest in natural history, through that introduce how museums manage specimens and perform research. The degree to which the tour achieves its purposes is assessed by analyzing a questionnaire given to participants of the tour. One result of the analysis is that (A) guardians who join the tour place a greater emphasis on natural observation and Experiential Learning. A second conclusion is (B) The purpose of the tour is being accomplished because after the tour participants have more interest in making specimens, museum activities and becoming a curator. (C) The significances of the tour is twofold. First, the tour meets the needs of the guardians, who join the tour because it involves experimental learning with the use of museum features. Second, the participants and the curator can communicate frequently because the tour is only attended by a small number of participants each time. (D) The fact that the tour, supported by the museum volunteers is to increase participant comfort level and to impress upon them the process of preparation. Participants feel an affinity with museum volunteers. These concepts suggest that museum volunteers can get involved in the educational activities at the museum.

Keywords: educational activity, Museum Back-Room Tour, museum specimen, experiential learning, volunteer at museum

資料：「博物館うらがわツアー」で実施したアンケート。左：保護者対象。右：児童・生徒対象。

ご意見・ご感想を聞かせてください！
 博物館うらがわツアーはいかがでしたか。このようなミニイベントは当館でも嬉しいばかりです。今後、よりよいミニイベントとするためアンケートにご協力をお願いします。

- ミニイベントを4段階で評価してください。 [1:不満, 2:やや不満, 3:ほぼ満足, 4:満足] (その理由:)
- ミニイベント後、みなさんに何か変化や会話がありましたか
- 本日解説した博物館ボランティアに対するご意見・ご感想をお聞かせください
- そのほか本イベントに対するご意見・ご感想をお聞かせください
- 博物館ボランティアの存在はご存知でしたか？ (はい・いいえ)
- お子様に対しどのような教育を心がけていますか
- 保護者の視点から、今後博物館にどのような活動を望みますか

●参加して下さった人数と年齢
 ●どちらにお住まいですか
 福井市内 ・ 市外 ・ 県外

(●福井市内とお客えになった方、どの地区にお住まいですか)
 中部 (香山・宝永・麻化・松本・日之出・船・日新)
 南西部 (木田・霧のり・足羽・湊)
 南西部 (東安部・蛤部・社北・社西・麻生津)
 北東部 (和田・内山・旁葉・岡保・東藤島)
 北部 (西藤島・中藤島・河合・四田・明断)
 南西部 (安部・光・殿下・越前・清水)
 北西部 (大安寺・国見・廣葉・本郷・宮ノ下)
 南東部 (衛生・一栗・上文殊・東郷・栗山)

ご協力ありがとうございます 福井市自然史博物館

感想をおしえてください

あなたは 小・中 学校 () 年生 () 才 (男・女)

- 今日の博物館うらがわツアーに参加した感想 (☹️)

とても楽しかった 楽しかった 楽しくなかった ぜんぜん楽しかった

- 内容はどうでしたか (☹️)

とてもわかりやすい わかりやすい わかりにくい ぜんぜんわかりにくい

- また参加したいですか (☹️)

とても参加したい 参加したい したくない ぜんぜんしたくない

- つぎにやってみたいことや疑問がついたことを書いてください

ありがとうございました

福井市自然史博物館